



怪談のような、実験映画。

ゼロ  
**零へ**  
Toward Zero

イメージフォーラム・フェスティバル2021 寺山修司賞受賞作品  
**映像の錬金術師 伊藤高志 最新作**

久保瑞季 笹原侑里 高橋瑞乃 シンキミコ 天津孔雀 松田美和子 原田伸雄  
監督・脚本・撮影・編集：伊藤高志 音響：荒木優光・伊藤高志

2021年作品 | デジタル | 1時間12分

主催：日本映像学会西部支部 FMF福岡 協力：舞踏青龍會 河合文化教育研究所・身体表現教育研究会 九州産業大学メディアラボ



イメージフォーラムフェスティバルで、  
伊藤高志の新作『零へ』を観終わって今、ひどく興奮している。  
驚嘆すべき傑作。ヤバイヤバイヤバイ！72分の実質長編。  
ホラー映画／映像の文法を徹底的に蹂躪し尽くしている。

佐々木敦氏 ツイッターより

とても力強い作品で、生と死の境界を揺さぶる鮮烈な怪談映画でした。  
巨匠ともいえる監督が、こんなにも瑞々しい初長編を撮った事に驚かされ、  
作品から迸る情熱に審査員一同エネルギーを貰いました。

イメージフォーラム・フェスティバル2021 寺山修司賞選評より

ゼロ  
**零へ**  
Toward Zero  
TAKASHI ITO

カメラを回しながら次第に死と暴力にとりつかれる女子学生、性に妄執しつつも死の影に怯える初老の男、男の手首を抱え捨て場所を求めて彷徨する女。彼らの心の闇が生み出した幻影達。それぞれの物語はほとんど交錯することなく、しかし奇妙な関連性、類似性を持って進んでいく。日本を代表する実験映像作家であり、常に映像の最前線で活躍する伊藤高志による静かなる怪奇と幻想に彩られた初の長編作品。福岡初上映となる今回は、未パッケージ化の短編2作品と対談を含むスペシャルプログラム。

上映に寄せて

今回私の新作『零へ』がイメージフォーラム・フェスティバル2021で寺山修司賞を受賞し、斬新さと独創性において大変優れているという評価を得、高齢者ですが若者に負けてたまるかという気持ちでもっと頑張ろうと勇気が湧きました。なんと言っても「実験映画」や「個人映画」は学生時代の私を狂喜させた魅惑の世界ですが、その面白さを教えてくれたのが福岡の自主上映組織FMFでした。私の原点はここに 있습니다。私は福岡の大学を出て東京の映画界で常識的な映画のあり方を叩き込まれるうちに、そうじゃないでしょ！という思いが強まり、退社し京都の芸術大学で映像を教える立場になりました。あれから29年間、学生たちに型を破ることを目指せ！非常識であれ！と言い続け、私もその思いを強く持ちながら作品作りを続けてきましたが、この春私は退官します。福岡に戻ってきたからにはFMFと共に実験的な表現をもう一度盛り上げたい、そんな思いを抱きながら『零へ』を上映します。

実験映像作家  
いとう たかし  
**伊藤高志**



1956年福岡生まれ。大学在学中、松本俊夫ゼミで発表した実験映画『SPACY』(81)が国内外の映画祭で絶賛。超現実的な視覚世界や人間に潜在する狂気や不条理を追求。代表作に『ZONE』(96)、『静かな一日・完全版』(02)、『最後の天使』(14)、『三人の女』(16)など。

特別プログラム 1： 関連2作品上映

『甘い生活』 2010年作品 | デジタル | 23分

出演：寺田みさこ、原田衣織、吉田良子  
音響：荒木優光

一輪のユリを手をただひたすら街を彷徨う喪服の女、ハンマーを引きずりながら喪服の女に殺意を抱く金髪の少女、車を転がしながら獲物を求める女。この三人の女たちが繰り広げる悪夢のような一日。



『最後の天使』 2014年作品 | デジタル | 33分

出演：村上瑠子、上川周作、大谷悠、松尾恵美、早川聡  
音響：荒木優光

理不尽な暴力に明け暮れる青年とその被害者である赤い鞆を持った女、古びたアパートで閉じこもりの女に執拗に迫る謎の女、この二つの物語は交錯することなく不穏なカオスへと突き進む。



特別プログラム 2： 対談

伊藤高志×佐々木敦 (さききあつし)

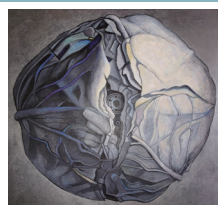
2月19日(土)

思想家。作家。音楽レーベルHEADZ主宰。福岡の出版社、書肆侃侃房発行の文学ムック「ことばと」編集長。映画美学学校言語表現コース「ことばの学校」主任講師。30年以上にわたって芸術文化の複数の分野でさまざまな活動を行なっている。映画評論の著作として『この映画を視ているのは誰か?』(作品社)、『ゴダール原論』(新潮社)など。最新刊は初の小説『半睡』(書肆侃侃房)。

伊藤高志×齋藤秀三郎 (さいとうひでさぶろう)

2月20日(日)

現代美術作家。1957年前衛芸術集団「九州派」、その後「グループ西日本」などに所属。1980年代から「キャベツ」をモチーフとし、現代文明への不安を表現した作品を発表し続けている。2017年札幌国際芸術祭2017に招聘。2018年高鍋町美術館(宮崎県)にて「96歳の現代美術作家・齋藤秀三郎 文明キャベツ」開催。2021年の個展で伊藤がその作品に衝撃を受ける。



齋藤秀三郎『文明キャベツ2104』

日時 2022年2月19日(土)・20日(日)

会場 大洋メディアホール 福岡市博多区中洲4-6-10 大洋ビル6F

料金 当日券のみ 定員80名 先着順

1プログラム 一般 1,000円 学生 500円

2プログラム 一般 1,500円

お問合せ TEL. 090-1193-6038 (FMF福岡 山本)

E-mail: towardzerofukuoka@ret.bbiiq.jp

URL: https://www.fmfukuoka.com/towardzero



タイムテーブル 2/19(土)・20(日) 両日共通

- Aプログラム『零へ』
- Bプログラム『甘い生活』『最後の天使』

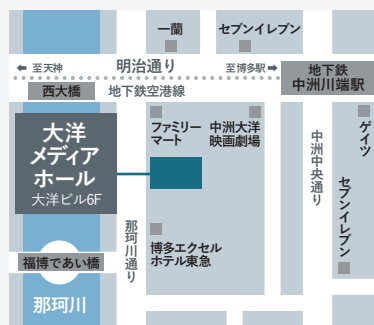
13:00~14:00 | Bプログラム |

14:30~15:50 | Aプログラム |

16:10~17:10 | 対談 |

17:40~19:00 | Aプログラム |

※入場は上映の15分前から。※各回入れ替え制。  
※対談の入場にはチケットの半券が必要です。



※会場ではマスクの着用をお願いします。※新型コロナウイルスの感染拡大状況によっては、予定を変更する場合があります。事前にホームページ等でご確認ください。